

インターネット向けの翻訳に必要な知識の教授 —モナシュ大学における 翻訳科目の一考察—

下茂 りか

(モナシュ大学)

In a 2006 study conducted by Vicnet, the Victorian government identified relevant training and skills for translators; one of the recommendations being that Victorian translators required support to improve their technical knowledge and capacity to provide appropriate translations for online use. In response, Vicnet and Monash University collaborated to create a Technology and Translation subject, which would be offered as a Masters course at Monash. This paper explains how the subject was developed, the problems encountered, and future improvements to be made.

1. はじめに

2006年、Vicnet¹は、多文化情報がどのような形でビクトリア州政府のウェブサイトに掲載されているかについて調査を行った (Vicnet, 2007)。これはビクトリア州多文化問題事務局 (Victorian Office of Multicultural Affairs, VOMA²) の依頼により実施されたものである。その結果、翻訳者には、インターネット上に掲載する翻訳に関する知識が不足していることが明らかになった。この調査結果をもとに VOMA は、インターネット向けの翻訳に関わる知識・技術不足を解消するための教材開発を、Vicnet およびモナシュ大学に要請した。こうして開発された教材は、まず、モナシュ大学の通訳・翻訳修士課程における一科目、“Technology and Translation” として使用することになり、本年度、実際に開講している。今後は、これをさらにいくつかのモジュールに分け、プロの翻訳家のための教材として、専門能力開発コースとしても活用されることになっている。

本稿では、まず、この教材が、どのような情報や現状に基づき開発され、どのようにモナシュ大学の翻訳家養成課程で生かされているかについて報告し、さらに、現状における本教材の問題点について考察を行う。

SHIMO Rika, “Transferring knowledge required for translation for the web – Monash University Technology and Translation subject,” *Interpreting and Translation Studies*, No.8, 2008. pages 321-328.

2. 教材開発の準備

2.1 翻訳関連機関からの情報収集

まず、2007年の6月から9月にかけて、翻訳者にどのような知識が不足していると思われるか、また、翻訳者はどのようなサポートを必要としていると思われるかについて、様々な翻訳関係機関を対象にインタビューを実施した。対象とした機関は、NAATI (National Accreditation Authority for Translators and Interpreters) および AUSIT (Australian Institute of Interpreters and Translators)をはじめ、教育機関 (1箇所)、コミュニティ・グループ (4箇所)、主要通訳・翻訳会社 (2社) などを含む。

インタビューの結果、翻訳者に必要な知識・技能として、以下の項目が明らかになった。

- ボールド体やイタリック体など、フォントに関する知識
- ある翻訳の仕事に対し、どのハードウェアとソフトウェアの組み合わせが一番適切であるかについてアドバイスできる技能
- どのオペレーティングシステムに、どのような言語サポートがあるかについての知識
- クライアント側で生じるフォントやオペレーティングシステムの問題に対処する方法
- 翻訳者自身のウェブサイト (バイリンガル) の作り方
- 専門用語の収集方法、既存の専門用語集の使用方法
- 翻訳の手配を行う人 (プロジェクトマネージャなど) に必要な知識 (フォントやレイアウト、言語特有の性質など)
- 埋め込みフォント、ユニコードについての知識
- 特定言語に関する専門知識
- 翻訳者が現在利用できる市販・無料のソフトウェアについての知識と技能
- PC と Macintosh の違いに関する知識
- インターネット用に翻訳した後、ウェブ上に表示されている状態でチェックする手順
- FTP、ウェブの基準、フォント指定等の知識

この他に、翻訳者自身のコンピュータに関する知識がまちまちであるため、何が欠如しているのかがわかりにくいという現状が指摘された。さらに、翻訳者が自分の知識を照らし合わせる事ができる技能表などの必要性も明らかになった。

2.2. コンピュータ技能調査

次の段階として、現役のプロの翻訳者がどの程度コンピュータに関する知識を有しているかについて調べるため、調査票を配布した。短期間により多くの人に回答してもらうため、それぞれの質問は分かりやすくすることを心がけ、できるだけ「はい」または「いいえ」で答えられるようにした。なお、質問数は合計 77 であった。2007年7月下旬、AUSIT の協力

により、ビクトリア州内のメンバーおよそ 300 名に対して調査票をメールで送付し、オンライン上での回答を依頼した。

その結果、マイクロソフト・ワードに関しては回答者の多くが基本的技能を修得していることが判明した。しかし、パワーポイント、エクセルになると、わからないとする回答が多かった。また、ユニコードに関する知識や、翻訳の品質保証で頻繁に利用される Adobe Acrobat に関しては、「わからない」または「所有していない」とする回答者が多かった。さらに、回答者の 39.4% が何らかのトランスレーション・メモリー (TM) ソフトウェアを所有しているとしたが、インターネットを介して行った調査のため、より「コンピュータ慣れ」している回答者が多かった可能性もある。

3. モナシュ大学における科目 “Technology and Translation” の開発

3.1 他大学で提供されている科目の調査

まず、オーストラリア国内外の Technology and Translation に関するコースを調査した。オーストラリアのクイーンズランド大学、マコーリー大学をはじめ、ニュージーランドのオークランド大学、合衆国のケント州立大学、ニューヨーク大学、マサチューセッツ大学アマーست校、ウィスコンシン大学等を対象とした。その結果、これらの大学では、ローカライゼーション、コンピュータ言語のプログラミング（基礎および上級）、プロジェクトマネジメント、翻訳・原稿の編集方法、ドキュメントデザイン、インターネットの利用方法、語彙を収集するためのツールといった分野を網羅していた。また、ローカライゼーションでは、コンピュータ利用翻訳 (CAT) や、複数の CAT ソフトウェアを扱う場合もあった。上記のトピック 1 つを、一学期を使って教える大学も少なくない。

翻訳作業には直接かかわらないものの翻訳作業をサポートする技術・知識については、どの程度授業で扱うべきかという点において、様々な意見がみられる。例えば、Laterman (cited in Pineiro 2006) は、学生は多様なファイル形式があることについては知っている必要があるが、本来コンピュータ設計者の分野であるコンピュータプログラミングやソースコードを学ぶ必要はないとしている。同様に、Pym (cited in Pineiro 2006) は、翻訳時にマークアップ言語の翻訳を行うこともあるが、マークアップ言語自体についてよく知らなくても翻訳作業に影響はなく、従って、授業では扱っていないと述べている。一方、Drouin (cited in Pineiro 2006) は、ローカライゼーションについて学んでいる学生は XML について認識している必要があり、TMX, TBX および XLIFF に対する理解も不可欠であると指摘している。

3.2 モナシュ大学における決定

3.2.1 科目の流れ

理想的には、ローカライゼーション、CAT、プロジェクトマネジメント、語彙収集、プログラム言語等の各トピックに十分な時間をかけるべきである。このいずれのトピックも翻訳

者にとっては重要な知識・技能であるからである。しかし、現実的には、一学期間（13 週）、週 1 時間の講義および週 2 時間のチュートリアルという時間的制約があり、これらすべてを詳しく扱うことは無理である。したがって、特定のトピックだけに焦点をあてるべきか、あるいはできるだけ広範囲を取り扱うべきかという選択に迫られることとなった。結果的に、モナシュ大学では、できるだけ広範囲を扱うという方針を選択することにした。

当然、このようなアプローチの場合、特定のトピックを一学期にわたり取り扱う場合に比べ、カバーする内容を慎重に取舍選択する必要性がでてくる。また、内容が非常に浅くなってしまうという危惧もある。しかしながら、そのようなリスクを犯しても、多様なトピックを取り扱うことにした理由は、翻訳にかかわる技術を学生に認識（熟知ではない）させると共に、特定のトピックに関してさらに研究・調査するヒントまたは能力を提供することを目標としたからである。

コンピュータ、インターネットに関する知識は日々進歩している。仮に今日最新の情報を学生に与えたとしても、その情報は、明日には既に時代遅れになっている可能性がある。しかし、その知識・技術は翻訳者にとって必要不可欠な情報である。その存在を知らない限り、翻訳者は自分が間違っているかどうかさえわからない。以前は、翻訳を依頼されたら、翻訳さえできればよかった。しかし、近年は翻訳以外の作業（ファイル処理、タイプセット、TM ソフトウェアの使用など）が加わることが多い。それらについて基本的な知識がなければ、翻訳者が行うべき仕事と行うべきでない仕事、追加作業であるかどうかさえわからない。知識がないため、適切な仕事ができなかったり、また適切な料金の請求ができない場合も考えられる。

モナシュ大学では時間的な制約が大きいという問題点を述べたが、TM（トランスレーション・メモリ）の習得については、13 週間にわたってチュートリアルとして十分な時間をかけることにした。これは普段ワード、エクセル以外にあまりコンピュータを使わない学生でも、TM ソフトウェアの基本操作がしっかり学習できるようにするためである。Garcia (2006) も述べているように、TM ソフトウェアの学習は容易ではなく、また、ユーザに対するサポートも充実しているとは言えない。しかし、ローカライゼーションが進んでいる中、翻訳者が TM ソフトウェアを習得することはますます必要不可欠になっており、大学などの教育機関でも TM ソフトウェアを取り扱う必要性が高まってきている。TM ソフトウェアに関しては、SDL Trados からソフトウェア提供を受け、SDL Trados を使った場合の作業の流れに従い、チュートリアルを実施した。チュートリアルは毎週 2 時間で、主に TM ソフトウェアの操作方法の学習を取り扱ったが、学生によるプレゼンテーションなども組み入れている。また講義では、TM ソフトウェアの内容に関連したトピックを選ぶよう努力した。以下、一学期の内容を挙げておく。

週	セミナー（講義）	チュートリアル
1	言語とテクノロジー概要、基本的な手順	トランスレーションメモリの概念、 Trados Workbench
2	コンピュータと翻訳	Trados Workbench と WinAlign
3	トランスレーションメモリーと翻訳	Trados Workbench
4	語彙収集のためのツール	Trados Multiterm
5	インターネットリソースと翻訳	Trados Workbench と Trados Multiterm
6	グローバルライゼーション、インターナシ ョナライゼーション、ローカライゼーシ ョン	Trados workbench
7	グローバルライゼーション、インターナシ ョナライゼーション、ローカライゼーシ ョン	Trados Workbench と Trados Multiterm
8	翻訳の品質保証(QA)	TagEditor
9	プロジェクトマネジメント	Trados Synergy 紹介
10	ドキュメントの処理とテキストの種類	TagEditor (html ファイルの翻訳)
11	ドキュメントの処理とテキストの種類	TagEditor (エクセルファイルの翻訳)
12	その他の付加価値のあるソフトウェア	Trados Certification test Level 1 の準備

表 1: モナシュ大学 Technology and translation スケジュール

3.2.2 科目導入に際しての問題点

最初に問題となったのは、SDL Trados のインストールであった。SDL Trados は他のソフトウェア（マイクロソフト・オフィスなど）と深く関わり合いながら作動するソフトウェアであるため、大学のコンピュータラボのように、セキュリティが厳しい環境の中では、正常に動作するまでかなりの時間が必要となる。また、Trados が作動するようになってからも、中国語やドイツ語が入力できない、ライセンスファイルを何度も読み込まないとソフトウェアが使えないなど、さまざまな問題が続いた。これも大学のネットワークセキュリティが直接の原因であった。また、Trados の提供ライセンス数未満の学生しかアクセスしていない場合でも、アクセスできない学生が出てくるなど、現在も問題は続いている。Trados のように、他のソフトウェアと緊密に連携して作動するソフトウェアのインストールなどは、6ヶ月以上前から準備を始めたほうが効率よくコースを運営できるのではないと思われる。

次の問題は、学生の「テクノロジー・アレルギー」である。これは Pym (cited in Pineiro 2006) や Jaatinen and Jaaskelainen (2006) も指摘している。翻訳を専攻している学生の多くは、コンピュータ等に関する知識が重要であることは知りつつも、その習得に関しては相当の不

安を抱いている。そのため、コースに登録する前に、どのような (コンピュータ)知識が必要かを詳しく知りたがる傾向があった。モナシュ大学の学生のほとんどは TM ソフトウェアを使ったことがなく、またタグやユニコード、プロジェクトマネジメントについても、ほとんど知識がないというのが実情であった。そのため、最初の数週間はコンピュータが得意な学生と、あまり得意でない学生との間でかなりのギャップが生じ、苦戦している学生にとってはかなり精神的な負担になっていたようである。また、モナシュ大学では第2週目まで履修科目の変更が可能のため、2週目から授業に参加する学生もある。このような場合、チュートリアルは第1週目から始まっていたため、2週目にして既に TM ソフトウェアに関する知識に差が出た。つまり、教える側にも相当の努力が必要だったといえる。この経験をふまえると、チュートリアルは2週目から始めるほうが教える側、学ぶ側の双方にとってより効率が高いと思われる。

もう一つの問題は、この科目が「従来」の翻訳に関する科目と性質が異なるため、評価のしかたも異なることから生じた。翻訳科目の多くは、翻訳作業自体に重点を置き、翻訳の過程およびその結果として仕上がった翻訳の質を問うが、*Technology and Translation* では翻訳の質自体を問うことは全くない。Trados を用いての課題は、入力した翻訳自体を評価するのではなく、学生が提出した課題が Trados 上で正しく機能するかを見るためのものにした。学生間で点数差を付けるというよりは、Trados を学ぶ場を与えることを最大の目的とした課題である。また、この科目には最終試験はなく、評価は各週のトピックについての発表やその発表に基づいたレポートに基づいて行った。発表はグループの場合とペアの場合があるが、レポートは各個人が提出する。評価基準が他の科目とは若干異なるために、他科目で好成績を残してきた学生の間には、「自分が期待した成績とは異なる」という不満をもつ者もみられた。授業初日に評価方法などを説明するのは当然であるが、この科目の場合は特に、他の翻訳科目の評価との違いをはっきりと説明する必要があることを痛感した。

3.2.3 学生にとって有意義であったと思われる点

学生にとって一番の魅力であったのは、この科目の実用的な面であったと思われる。この科目には、TM ソフトウェアの使いかた、プロジェクトマネジメントの基礎、見積りの立て方、フォント上で注意すべきことなど、課程修了後翻訳を始める際にすぐに必要となる知識が満載されている。コースの初めには、マイクロソフト・オフィスの基本的な使い方以外はほとんど知らないという学生が大多数であったが、学期半ばには全員が、ほぼ問題なく TM ソフトウェアを使えるようにまでなった。先にコンピュータに慣れている学生と、そうでない学生の存在を述べたが、これらの学生を同じグループにし、いっしょに勉強できるような体制を整えたのもこのような結果に貢献したと思われる。また、出身文化の違う学生たちを同じグループにすることにより、文化の違いを認識しながら協力して課題に取り組めるようにしたことも、学生にとって非常に貴重な経験になったであろう。たとえば、積極的な姿勢

をとる西洋系言語の学生と目立つことを恐れる東洋系言語の学生が、お互いの気質の違いを克服しつつ、協力し合いながら学ぶといった経験である。この科目では、ソフトウェアやコンピュータ関連の知識を学ぶだけでなく、学びに対する異なる姿勢に触れることができ、学生にとって大変ポジティブな体験になったはずである。

6. まとめ

モナシュ大学の修士課程における *Technology and Translation* 科目は、さらなる改善の余地はあるとはいえ、インターネット上で使用するための翻訳を行う際の知識の提供を行うという、当初の目的は満たしていると考える。しかし、学生が職業翻訳者として活躍し始めた際に、この科目で学んだ内容が実際に有用であったかどうかを評価することは、今後の大切な課題であろう。

また、今後、この科目を現役のプロの翻訳家を対象にした専門能力開発モジュールに編集し直し、これを幅広い専門家向けに活用していくという作業も残っている。その際、対象となる翻訳家のコンピュータ知識の多様性はさらに広がる可能性があるため、事前にコンピュータ知識に関するテストを行う、コンピュータ知識が不足している人に対して別途コンピュータコースを設けるなどの必要性があるかもしれない。

【参考文献】

- Garcia, I. (2006). Translators on translation memories: a blessing or a curse? In A. Pym, A. Perekrestenko & B. Starink (Eds.), *Translation Technology and its Teaching*, Tarragona: Universitat Rovira i Virgili. [Online]
http://isg.urv.es/publicity/isg/publications/technology_2006/index.htm (26 May, 2008)
- Jaatinen, H. and Jaaskelainen, R. (2006). Introducing IT in translator training: Experiences from the COLC project. In A. Pym, A. Perekrestenko & B. Starink (Eds.), *Translation Technology and its Teaching*, Tarragona: Universitat Rovira i Virgili. [Online]
http://isg.urv.es/publicity/isg/publications/technology_2006/index.htm (26 May, 2008)
- Pineiro, O. (2006). Summary of discussion on What is XML and how do we teach it? In A. Pym, A. Perekrestenko & B. Starink (Eds.), *Translation Technology and its Teaching*, Tarragona: Universitat Rovira i Virgili. [Online]
http://isg.urv.es/publicity/isg/publications/technology_2006/index.htm (26 May, 2008)
- Vicnet (2007). Communities language online - Current practice and future directions of multilingual information on Victorian Government websites. Melbourne: State Library of Victoria. [Online]
<http://www.egov.vic.gov.au/index.php?env=-innews/detail:m1035-1-1-8-s-0:n-1452-1-0--> (26 May, 2008)

著者紹介：下茂りか (SHIMO Rika) モナシュ大学人文社会科学部外国語・文化・言語学科レクチャー。ニューカッスル大学現代語学科博士課程終了。NAATI 認定通訳者、翻訳者。
連絡先：Rika.Shimo-Malmberg@arts.monash.edu.au

【註】

- 1) Vicnet はビクトリア州立図書館がビクトリア州に在住する多様な人種のコミュニティーを対象として、情報およびコミュニケーションテクノロジーやサポートサービスを提供する機関。
- 2) VOMA は現在 VMC (Victorian Multicultural Commission) と合併したが、文化、言語、宗教が多様なビクトリア州の法律や政策に関して、また適切なサービスを提供するために、ビクトリア州政府に独立的な立場からアドバイスをする機関。